大鏡

伍

上

增
775
94

宮内省 図書寮 775/94

大鏡巻之第八目録

宮内省 図書寮

賀茂臨時祭始事
八幡臨時祭始事
九月九日節止事

宮内省 図書寮

仰せくあさまくめづらかなるぞかうかつひしよこそはかつらひしよこそはかつらむいとくけうあるこ
とをもうけ給るうかはくもこのくはばくた
しめとなふものぞやうもとよりきこゆる
ものしれかくれどくこそ
はつかしきハんかくそのこと
となるさまのハ魂すけまバかりなる人も侍り
九よ侍りしけれ大内とて侍ん東松のえんぞの
みこそもそれなりしかの四郎いとかく人
ものりくかつてをのがおやのんしをもつかいのえん
うどよりハさるぞ侍りハかりにぞ侍り

うれしき事かぎりなくおぼしめしてはものまいりなどあそばし
ければいと不敬ながらそのおりの御ようぎ
さいはの二日ならびに甲午寅申日つきも
ものもせずなどいかなるまぎれのことなるにうば
ちゝのまうでなどしたまひてさはり
せじとおぼしきかどふけぬるとのがれがたうば
ゐうしてえその日はゆきうまつりよ還向（げんこう）はうまつりざり
しかども御ものゐうの御孫宜（わぎ）事うし
ろくはうまつりくいとうきくてやがて御
ものまいりて一夜は宿なんてみなは日ゐうはうまつりに東
洞院よりのおもてゐうるまで大炊御門よりかうゐうよ

人くはうまつりけるあやしきまでうば
ゐうのおぼしもいとくふなるまで人ゐうこ
ろをみのがすいとおぼつかれくも焼亡（やけび）うて
おりひくうまつれあるべきもそなりたるさま
かのさはるはあふくうまつりかくまで
でゐうびまうまつりうば出車（しゅつしゃ）の御車やどりをきこゆ
きねかどきこゆ人くなどの見こゆ人
あ御ものくはせ事ぞくくと人あり
うと成御ものゐみうどわさ御ものを大炊御
けどめたてまつりてそれ人まつりあり

ていそぎまゐらしなどしてぞ拾遺集にみゆる事しるぞ
ん後一人七ぞうらふにや元亨六年けるに奏侍り
さて紫式部は寛弘の侍従なりぞ寛平の天皇はじめより
ところ給はりし御しるし ならびにまかりつく侍
りけるのはじめなるうらくなるまで侍従なりけるにせ
給ひていたしけるはいつまゐらせかはとぶらふさまへ
まきりそちらくせんくかいしく東西とはおほくに
くれたるいぬらしやとおぼしく風ふの中よりたる重畳
してまかりきまじくひにはどふ河中ざうりや侍る
きんのちりすぞうけ給はるばかりの時節あらん給はゞ
しましてさすらひのまさのやさせ給ひします

ける程なりける事そのことはよふに日記にしるしまゐらせて
侍りけるを中くかきしるしめしたまらん
あかそらふに中へさふにも侍りけるそのちら六年ばかり
ありてまの紙のまつりはじまりけん後ほつく
賜はりし御しもしぞ初ほく侍るうち月にこそり
の日さして侍りければ風ぞてさも月のまでのかり
の日かくは侍るぞはじめ給ひあづまかきびめぐらし
よし御さめ中ねぶりし

ちらすやゆるきの風しかのむかしまり
よろづ代までもいつはかはらじ

古今集にのりて侍りしかれ人あまたてて侍るなれど

いとくよみ侍るめるいとにもあはれひとつ侍
せ給ふ出さるるよみぶぐ中せどかくしもやれ
ましますやうくの院ぶの祭朱雀院の御時も
ゐ朱雀院むまれさせ給ひて三年ばかりま
す。とのゐ出かうしまつりぶよりうくく
藤のうちうしてかりてたくまつる波の小蓮
よりぶりの家ひく天暦の門とばいとさも御ゐ
ゐ給ひいとくさ行ゐ御ゐ
ぞ朱雀院むまれおはしまさぬ女のさう
いかしも侍ぐまさて位よりぶ世ぶ門が
礼ぶ東て主の殿ぶてとぞ侍ぐ其ぐづま位ぐ

侍ゆさ侍ぶ集わもうぶく侍ぶ
松もおひもさもうけ世ぶいりあ
おくまるとくぶ山ぶ
とりへどみるげさ山ぶもものぬ中れぶかが
ぶくぶくぶ紀中ぶ中ぶ
るれど寛平御ぶの山ぶ後のりなくぶ
しくたりふ行ぶ侍ぶ伊勢の君ぶ弘徽殿の
ぶ書つ世ぶ中ぶ分ぶ家なるゆとぶ
ぶるれもあひも思ぶぬぶ紀と
ぶさぶしやなふぶれし文
ゆうぶ侍ぶ

寿むかしありぬけりとかやおもしろく
ゆきゝの人まてもなかめさし給ふ
さるハかくいはれし人法皇けふ波へとゞめ給ひ
崩後は御悩しつゝ御かくれにならせ給へるとも
御かくれのゝちも御門しかるべき御国をさかせらるゝその
後御よしなしあひたまへる御国の民の御なげきにてや
むかしよりそ太子宝をつかひいまじう帝ふかくて
くらゐ位八諸国の民百姓いつくしみ給ひて山峨をこゑ
まつの殿よりなかおしおかり候へバものまかり
まても寿をわすれひゆれなりて侍りともたくしらう
おもいきれバこをよにけ給へしかへ称ねまでもならじ

さこく児侍りぞ人くさこしめ坡公薩を申ほい
はびかくあらわされバ川をそ総紙禄けくと
帝かしらそ思ひ給へしあれも信よ小を坡侍りしるぞ
伽藍とそ懺悔侍りけりなるべしかりしも六条武殿ゝの宮
ともしハ延喜帝一服兄弟よおわりしまで後野の殿筆せ
さま坡給ひしよ公文侍りきつゝ坡給ひてかりけれバを
京古禄遷都せさ坡給へかりしかバかへり給はずさせまゐり
あるせ給へかりしたび見かりしとくめてさ給ぞそなたせ給
〳〵まゐりしよりひしさかひの[illegible]をとうふ
すぐる府よ仍かりて婦かみよ河の殿とてうりしもぞ侍
牟よ侍りてかりし給へる人くさかゞ名帝しかね

なく世つも無きげに有り様なるもみく
れて海に入りぬ山うちいで海に出で
せうとしいひ出賀の島とうすぐる御典の風のうへ
に船まうけてゆくれば山の陸に入かた
はのいとうちうちに山はかすみきぬうちうち桜
なるふ賀の気色にて向ふに雉いとんちやうのやうに
くるくるひつぎくかたてに桜の枝を持て
て行かうありめくさるやうとあり山
中男の船にていとふつゝ初瀬にて浮橋たい
くらに大さく延喜帝はるに知てそはりまるる
さ船まあらるる人まに拍子ひとつ海にる

ゝ行きはてゝかん人に拍子ひとつ大小事さ
んくらしとそはりせるするうれうるもけふく
き典ゝ物いもふれはくさ拍子さそれらでうあり
なるげさぞとうせすまひつせち九月のせちはん
ぐくらはきふく拍子せもれど九月ゝ拍子也
拍ひて九日のせちいうもとうとうとうも乃日
左馬頭のまにて左さうもうもうもいあれ
ううし拍子ふるとうたうしそひのかうしう仁忠乃弁
とそ拍子ゝうたうたうてもやはり事ゝ拍子わぐ
しゝうるしゝたうふとうとうのうくうとうのんうし
うけうせさ波拍ひしゝうり初でほうるるとつとめ

[illegible]ひてむまをとづこそやをひてこゝにゐる
まことにを中山にをいをやーゞ宮ゐぼうさの幷曾司・
のうへうはその勢のさうはなのをいまゞはをて待〜ん
をせおとうかゝのくらをはあげうひをまいをとうらき
うをへをそうおく以の塔まふまをんをんをいまつ〜んを
みうう山をとうのうりをはううまぜくをうをつきく
へのまうをうをればいをくうをゞをそれいくせ
のこれかをのくをうをこうまいをとうらをれうく
ううれば初をゆのうのたうくひををのの敬をををを
見ぐるーけまを延敬をそうーゆへのをうーれ
どこゞをををうのうのてかををのををはをつをハけう

め一度まつりごと絶をかゝでおかやあごをとうづ
はをあくのうまをかくもあゝむハなぞうをうの行
うんをををれををもをれいでみいをくを待ゝ
事ハ座ゞて指ゞ者はを大歌の行をのををはをうう
ぢはうやを不のはりのの山をの七歳をををひをを分
行へうーばうはうををををゝうゞ万人ををく
をぬ人待ゝざうをあまりはかゝうのひるやうう
ををまひーうゞ山のうをめゞくうををまりを行
をゞうーををはをををををををををををををを
おくを行ををやをををのをををををををををを
まつ中へを事もなゞをおゆゝふをゞひををゞを

なくやうさん法皇のとしつくさぬやうしあそ
せられてそのおりと茂京のおくれあそりてちう
ふるつゐきのうちうしはくなりはくはい
しひのこくをちやうさん
和平大井の御幸もはるとうぞうそえあり
めべきことうと中さぶらふてはうしうさん
京のおはしまいりきこうぞう
とくやまもみちはあるはあるハ
いま一しひのうゆきさうさん
あれいつもいしものるさて幼年まあまさ
の題をあらてやまとてつうまつりたうり

猿山のかひよさけぬとうふ部と
射恒

ようしうなくはそあしひさの
山のひあるふやうあうぬ
その日の序題はうはさはぬしそはうまつり
ゑ朱雀院の御いふよはたまはいれさは
はひうども將門うれたはいぐきておそれそく
さぶはしはうはやてうつ坂はひの
ぞうそのはよの事あるさ海そはあや
うはりうれ御石のはりふ幼年せぶはへつう
とかるはあるさ海の四ひやまのめでそくれ

き事などそうせさせ給ひて今い春宮をうくうえ
きゐんさまゆうしきゆうさせ給ひきりて心ゆく
ゆくいそぎわがしめすゆふとうれかてか
どおくゆづりきゐんさせ給ひるよきさいの文
をさ思ひてもやさぐうし事をなぐゆくもの
事をとも思しいとくなりせひひろり
さてわうさ勢ひひくはん人くはなげきけるを
らんどて侍りし后宮きこえさせ給へうし
くにゆづり九日
日のむうりいそぞふるふくはは
うれのうちの屋さへかうん

きさいのうちやは沙汰
ゐうをのわうちわかるやえくるうん
おるしうしゐのうりかうか
なぐきゐんゐうし流々(ながら)脇侍(わきざむ)すこそは
おうしゐうしうはすこしひがしめん
こゐあるとく侍りしは波世給ふ世のうるぐせ給ふ
給ひうりあるいまうくうはいとなりめし
くおうしゐうしゐのうち好くかうせ給ひて太皇太
后宮九わきれくおうしうをんくそまうし給ひ
ていうしうをゐわうれさ勢給ひて
くれ行のうう世をもふなりめしも

初めたるせすそなる紙のうへに
四とをかの程しるあるれうををかつらー
ひりの日はかんうどいるさ中屋紙のーびなつーう
なるものさしをかくはは庭おかるも四うの中さ後ひ
ちとを人申のうしう紙をどへをいぐいふのと
人をそ移ひるふ拾ちふなんのうーまをを
よあの中とうーうしうれどをてをわひるのりもう
乃きひーをのとなどをよ人へいぐをうへんとう
作らもをれはをーうあうれは作ちーちは
こは天暦の仕付よ清源敏の宮の梅は木を拾ら
しかどれををを塚形ひーよ今ふ塚ーつをひ

とふていはうをるうーしを形ら事形はをてうきもの
どりはえ月をうどーきんちをのよをの形をり
しひと京四ろをあるをーうぶをを作ーうを
四は京のうをこくをるを為をてをを形ら木のや
うぶいうりつーきぶ作りーとわをるーうぶいへ
あうぶは木よれれゆひ作ひををまのれをいを
塚をうびーうをあるやをうをいをりををまりう
をを作ーをなふををを四流ーれをを女はるふく
うを形く作をけふ

勅なををいををかーをーうくひ奇の
やうをうけくいをうをうへん

とあるとけるにあやしうもなきがしめされてかみも
のゝ家ぞくそこらのさ勢なむ出されぬいつゝ枕上の御し
のこゝもそ院乃きむ所ぬなむかり遠根(いえん)のをさなども志
よりありなれこくあまへなかし申しけるこゝろ
きこえは生のそくかくきこえや侍りきんさんなはなりふ
風となる木のりてまつるとなりとてきぬのきこえれさ
つましもかくしくおかとすきしとてあまやうにまうしぬ
志げき文いとせうしやはしくなりひなへしとは
此おもし内付のとしめ承香殿(せうきやうでん)の女御とかいふ宮女
御よ法門むさしるこゝろ琵琶なんどかよる秋夜
なふくれなり琴(きん)といとめでたくひきならしれいはそ

ぎるこゝろ琵琶ひて御ころへつかはなしゐしかれど
人やあるともなげしくしてせめてひきならはもたし
しめせむ

さりぬるにあ風しおなじのゆふされけり
おもさぬるせはたをとそきこゆれは
しもさえこしかどころせちなりしかは收集した
侍るころいとしうはへいひふそあまなるなかりけるか
やなかある人撫爪風しなへるといふへた遠國(ゑんごく)よりまう
うちも和泉(いづみ)乃くにより貢之れぬしるえんえんとくなり
て侍りしをあるとなれしとて世にいふしやいとまれく
侍りしをちびのことかもさゆちいきあやなふかし

こ崎なとかくきこえしまて娘かさうしにあつらへ見せしハ
わらへるまちもしのひに若きあひするものして
わかしかりしこの侍（さふらひ）もいとしけしてけれハ文
かめふみなとをもしてくれすこしわかやかなる手
よりはらうれしめらるへし京人なりとものしはへりきこえ
やはらかなとも侍らはまことによりこそおはされは
うひうしかたはりくしはすとこえ給ふぬかも抱
とゝとりしゆきていつものゝ人なくしも陸奥（みちのおく）にあ
さうはねましそ侍るとふりて京にはあらしぞ
都の人とは見えすとてまつはおなよく給ひし
きたなくなきもしゝ見人の此使にその折ゝ侍りし

とのふは中将なる君よりそくきくもわりしくかりぬ
いとひうなるつらなる小刀とそられわかきこえしかんは
さらん舟をわかゆやらへしその方よりしるもえて
おほえ侍らんさくのわさと給ひしよあふさられ笑り
わらしてよき給へかりしおそとこそうくおほえ侍る
見んやこはまつりものとあふかられ
せられまそてきぬく侍るや田しまし
なといやそうくしけよかくるさ国まうしくにお
ところをしへすちさはさ人なとひとくわか
すゝらさやうのかういおのゆへんものゝせんたま
しねるもいとらしめく侍るとそろそとえわりて

えさをかくしたるほんぞうをとりてきいて
これはなにものぞ女人とそいふとこたへて
もいまゝにあぐるうちにめくるまゝに
ものなどもあまたいたりてはるかに
きまゝにあるかり如もかんぜしてはうまつ
ぞたれとおもはくるまひて忠信とも
ふてまつりたりうらべかたらひどもいとの
きさるもいざりけるやあんずのさゑもん
はらんじいもて兼博中納言令峯房樹のさいしやう
のはゝなどもとりて作りあるとて中納言はんちのく
まぐにかくれ宰相殿をくるいつかうすやうよ

てを作りとめるこゝろ宰相殿五十まで生る事れく
ものくおかゝ面けまとくれ角るやうそいま
をりけるやいたるまつ
うゆるいつゝ川ゐたるのこゝ
ぞ見へるおもまへのをちのわをまづひつまい
宝殿よたちまりて
おもやゆる神のおまへのくちもれも
ものきもとおもおむすけるう那
とよりとへとも神きくわとれひさを作ふて
新もさうへ宰相もおりひうを沢頭ちまもて宰
相まてをるを作りてをうを作りしかといへば

うものぞ人まうしやはけうおぼうるとこそうつる
し侍りつるいつぬまこいきりや侍りもん祇へてひが
事もやらん宰相とぞみそまつりしと人と
なりてこそたうつるうをおれといふ五十六ぞそ
宰相ちうしょう左近中将うけくをいまセーう
うおぼうい侍りもおぼわく侍りさらしかく山法師も
ひいで侍をぞ見てしかるかと四ひ
侍る山さふひいでぞ侍るいうそくそば物をわき
ちうとうてい所とこのかれぞ人(ばさまこだ
こそきうすきおぼきれ物のかよもあるこれ
ちりざざあるはまうぞきうていぞちりく

いろはりはくひ侍りうぞさそうまこうけそ見
てあるうめせさ侍りるんやうるおぼうおぼうきれて
をおぼさかとまさ一欲もほうぬ見せ侍りねをや
くわくおうくうくらいきいくおぼうきいくおぼうも
を世つさもあうう人(さくて侍りとそこの女二
百斗なりて侍りを亜相(あそう)の中納言も侍りの宰
相もいまそであくうぞ初ぶおぼそ沢よりぎふも
いまやうはうきものぞもけうまうれ侍り
ぞうおぼいのうあぞはいきあはざうまうぞいと
あやしう侍りまうしてあるうくうう物ぎふ
ときあてぬしくもあるぞきくもうつく侍事

とはおぼえ侍れ家にふぐして侍りけるが女
房さぶらひ給ひてたゞすこしこまかなる事どもは
きこせ給ひてすこしかくしのきまのむ人々は岳清
内侍のかみなりやなにかし侍りしうだ内侍のかみのとは
ときゝくまうでかうきこえつとは左也ふといふ
人々あまたは御ぐしなりたる琵琶ひきよすませ給ひの
節（せち）に玄上（げんじやう）あそばして青海波（せいがいは）を弾きまつ
られけるは御ぐしかゝりしものゝ博雅三位
なども玄上のかくへ思ふかばしなどさせさせ給ふ
是ハ永明門まできこえ侍りしは左楽屋に侍る
つまでうかゞひ侍りしかばものゝまゐりくへう

ひくしき事ども天暦の御時までなり冷泉院
の御代になりてこそよろづはくだりけるなれ
し侍りしうせ給ひたる事もその御時までなり
小野宮殿も一の人とゝ申せどよその人になりせ給ひて
まうくはかやうなる御わざなどもうちまかせさく
まつりごちなどもえしもすべきさまにもおはしまさねば
惟成の弁もひとつかしこうおはせしなど御めしても流
とし小野宮殿の人くまゐり給ひて円融院の
どはなかれども良辰令月などうち誦（ず）せさせたまふ
後いづくよ一条左大臣殿六条殿など拍子とりてむし
ろ田うちいでさせ給ひたりしあそばれし先帝のおほむ

[illegible]
敏とゝのまうして年いまゝせ殿給へう給ひ
ぬ給ひぬれども神ぬれども給ひより給ひなりや何
年もきくまうと見まく人忘あるいひあるきさい
とはおもひきまうざるまうとくふかう事どもまこのく
きくまう殿給へどなくいまさすこしもわかよ
ゐまうくいへどきぬいまあまへてうさ武門ものを
のまうはうふ源氏の出年もまはんこれ一番敏六
宗後生い六宗一ふ式部ふ神ふまうおもしま
す寛平御源ゐうまうばうりかうふ会はあうさ
まいうまくよ松ゝ御ていづまともまうる見宗

見うまうはめゝ卜殿給ひよ給すこう六宗
ものまばあゝ中殿給へまりあふものいまあ
ままう給ゝくゐ年まうゐうゐ給ものゐ分うまを
まを給まて給うまうう而ゐおうゝ御まうゝ也
給ゝ敏い見まうゐまは無光まをおうゝ御ゝかゞ
見うまうまあゝまやうづまをまうまはまう
殿給へまうばなんゐうゝ今ゝうを給まを
宗せまう殿給ひて仁和寺まを松ゝ御ゝかゞ六宗敏
殿理うまて松ゝ御ゝほどゐもゞ仁和寺へまう
殿給へ行へまのゐを一度いまを大宮まうまを殿給ひ
て一条まうふゝ御ゝまふ松ゝ御ゝ又一度ゝ西大宮

より[illegible]ぶ[illegible]ひて二条より西なるふもと迄
行ひつゝ内裏と内侍所とを[illegible]て[illegible]ぶれなる不思議を[illegible]
現せさせ給へるいとそこなる内侍所へなりぬ[illegible]
一条殿は[illegible]せられ[illegible]は親王たちの御子とそよの
あんないもたゝずしりぞきかりしたゝうべき事
のかりそ人もとさせ給まつる事まことに寂寞よ内侍
ひとりなるとそのたゝ[illegible]
八幡殿生給ふ[illegible]御馬奉らせ給ふ
も浄衣とたゝうべきなりけるもまつりもせ給ふ
しうたるや[illegible]ものへもうさまよ山とうるうずみ
てひさかるはとふとびうちられとよひうとを

あびけうせさせ給ひうゆんいうるかうしくおハ
しまし人の伝とうくさせ給ひうとを人行うの[illegible]
[illegible]ものうそは東三条殿の法華経まうでせ給ふ
いのりまうそは式一条殿もまつりもせ給ふ
[illegible]なひぬもとさせ給ひうなるとを
とそ世のくたちのうもうはかりの内ふとをもう法
うくまへうとを行ひうとをいとくぐ
中さ給ひうなるとを生まうすくうせ給ふ
[illegible]ていと毎日に南無小悟大菩薩南無金峯山金
剛蔵王南無大服若波羅密多経とぬゆたれありふ[illegible]

ぞふとうて一百八遍づゝ初んじゝ多数ひを
ふるそれなりほうの事はとしを長させ給て紫大文の
大石宮ゝうゝ孔子中人の身をれたきう分給もて
なつゝかゝねの年号うゝ孔子の教
はゝりたるおふるとなくゝ乃やうゝうひゝさ
歩給ひをれど一条院の内裏乃陰陽祭ゝ平のもとゝ
て上達ゝうゝ物ゝうゝ外記乃すゝ
乃ゝとを給せ給ふてまぎゝんかゝてくゝうずさひ
のやうゝうゝ歩給ひゝ中くゝいうゝ給ゝ
ときくゝさのゝかゝるゝはゝうゝもて文ゝまいゝむのゝと
をもい給ゝうゝりゝうゝを給ゝりゝうゝも

ゝ給さはゝぐふおひの乃ゝ乃ゝくゝうゝを給ひ給ゝて
とゝ給ひ検察大納言教ゝ乃ゝ給ける教ゝ人ゝ
てゝうゝ乃ゝとくゝてゝうゝくゝもきゝうゝ給ゝうゝ
ゝやゝのゝのゝゝうゝ給ゝうゝて給ゝゝ給ゝゝ給ゝ給ゝ
のゝ給ゝ年乃ゝゝ給ゝゝ給ゝゝ給ゝゝ給ゝゝ給ゝ
ゝどゝさゝゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
納言いうゝ給ゝ給ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人くはれてしまふ物をやとうへどこれよりもけ
やうの人をおもしろ面さすやいあるとうふひのいへで
おの心人の大納言なりしく秋信公任行成俊賢など申
者をも人さうもさてまうさわうくはく物侍つる中
ま郎山院内大臣右近衛陸奥国軍琉球使者
うんぞーばうはけうあるものいざうきくそのおとを
殿人をうまてはんの小野文左衛門でおりまし
しかるのものまてはけうまうけ使いはきくか
ばうまうんうばうてまつる殿人
まうればうべき人もうふひはいうるうう殿人判官
代ばうしていはうくしばうまおり

まうくまつる殿人をいと時さうおりう
うう御前ばとはいはうれはうばうーうえん
まつう殿させばひうくもおれ殿をうぐ殿さ
おううせうまへもかいふかうばかんうおう
せうれうとふうて実資公人ばこれのこ
どもばうまうあるうんぞうばうまもふ
御まやうの馬どもうてさうひーかうるの殿
うまうう頭中将宋帝のぐまうをふりりの
殿をもばはうくいぞ殿はつる物人車ども二条
大宮のばーよばうかうまうてうるよ布衣の冠なる
殿ーばうう車のいうーうへうるべうるも

いさわひめうぐうれい雅ぐうりゑんとあやしく思
ひめ〳〵るよ頭中将をうさがさ〇ゆきをうとゝうつ
とゝうう馬ゝのつとて行すゝ清のたゝしまを
なをとりとゝうく車どもから人をゆゝびたた
ちさいぎくいくものちゞ一条ういまこゝ小な
まりて北条院のはいぐづゝ御車をそれ出ちゞ
もわりてきゝうゝひなゝ行ふがどようりうえ物り
ひゑつゝさわゝくまふ上達部をちつの足行ふ行わち
ついゝくのくちもじあやしくこ行ゆぞくせて
せ行ゝな清のかりしまゝなゝとゝきゝなゝとふあう
じゝわぼちゝ頭中将殿おりしまゝくいふゝぞ

内ゝくかりとけゆゝく行びえつく出車ういそ紀行を
けゝく清水詣むゝ大臣二人を左右の法車のどうをさ
角てをゝせ行へつゝ京ゝ京殿一条左大臣殿をさて納言
殿をなりえのこるゝくふ井かゝせ行ふ殿と
人を御車出ちゝかりえ行ちるふ行ふ中ゝうえ
ゝかゝ山牛のきわふふりしめぞゝく清ゝもの
う御簾人結法をゝれ物りてゝうゝ中清大納
言殿ゝ大臣ゝ中せゝ物ゝ清ゝひそおゝを
ゝ出車のまゝちゝくあちゝぐりてをゝあこと
袖のをゝさぼりゝ清ゝ内ゝ清井清
ゝ内ゝ出ゝく袖をかゝあゝ行紀

うたがうかの御あつかひをもやうと
ひてをのこひくこゝをたのこひくこゝを
しげすべくさだりいうなる事みんなやげふ
あるんるるもとさ面なもばんくも御々御だ
うり況乃御まへうもすこしなみぐぐれりまま
しけるとそのうちようもあるうち神泉のうと
うはをうりれうちうてこれ御々御一のり又わく
御りし御なも仏法うとくてよのくれ大法會
なるぬるはうりあるふさもかりしも御てう
法りてうりるさかくくくかくを河人道教の入
唐乃むまれるむもをうくしし清水法師乃せう祝

しるとを海るさうしうけどうり安道心乃ものく
けるめてれ御をはるゆうをれるうまるつを神分
心眼表白乃法をかるゆうり法へるうしまうこどくあつ
まりなるうし一万人ざくこそをきて御りしうを
道理を平也又清水法師なるを法華しけ
人乃導師ようせられくいくと清水法師乃国主
説法者なもばりうぐすうとをきくうかうけうれく
をれるるくて独学しうれどをうけうれく
を蓮華乃うへまをかうをうや盛を聖昊
うればうをふと人をうく四乃をうるうるを
乃なるしねあるゆいをどれるみりうをうしいを

こそほとんど給ひぬれまことにうけ給はりしはかなし
くもり侍らしつゝあれたる文殊師利などもさこそおはすらめ
ひとまはりかへりきていとめでたき往生人のやうか
しげなりけれどにはかに法師どもの人のかたくしける
おほかたのことのけふあらはれてうちおもひしらるゝ侍りし
くはなり法師原の五大堂供養しはてゝいまは侍らず
やかてさしもあてさむらふしにて百僧がしらただ此堂
のさとに扉もそへて題名僧座はさしるしつけ
うちまうすいそのうへの席にいまくれたるかぎりさまこと
の僧綱はせきのはうにつけてゆづりけふの御事二人に
守入つかうまつりてし御ひとく僧坊ゑかれける此堂法

南都のてらしるしかへしつゝゆきたまひしかしこつかへれ
ものといひてしうつりくてまつり坊あるし
なるとねぶくはそのほかめし僧達思ひたまふく
このころはかやうにてかきまいりけるいへ
此風もいとつめたくさはらかにおほえていとよく
まつりのおほえてきこえもいよいよはさりたる様よ
此むきそのさまにそいかほとかしらんかとしたるの
給ひたれたまつくかしくりたきもたれくかくして
法世にさらに事すすみ侍りなんやかくれ侍りなんは御事に
ちかひにいましくわかりしめしことのはりわかくて後
いかにしてかくわかの勤節ないくあそびてはおもしろき

敏とはじめ申てよりて人々はゆるれゆくもの
ゝもさこそあるべきなれといはれたりけんはぐるかる
ゝのあるべかりけるよ御ぞうしの事ぞ　いぞみこ女院
の御父よ　山関白教通　春宮大夫教ゆきこそん
まゝ世をはなれ給へりしかばいとゞ
けさくあてゝまゝ侍ひて　うく侍りて世をひて
まゝひきてゝ　ゝねさ海ゝ　いつ侍ひぬるう
ばゝしさめでたさふなりぶ事かゝしとゞまりて
すゝゝ　ゝくそんのいとかしこくまさかりよう
あるとけもとゝんてまゝ世をふよ出くとおもい
いとゝたくかゝる御ゝくゝ　かけさ侍ひくいま初め

ゝ人々もいとゝびまゝ侍ひて　ゝきみかく侍べう
ゝけるゝゝんとゝ侍ゝう　出羽王を
ゝるゝゝず　ゝ侍ゝ　ゝ侍ゝ侍りんぞ　ゝ海ゝ
せさ侍りんめるもたゝべゝれとさよう侍ゝ侍ゝく
まゝり侍ゝゝなりまゝ侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝれ侍ゝゝ女流ゝゝ侍ゝ　ゝ実教といく
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
門ゝゝ侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

侍らざりしよねくこそわかりしおのれ今に見てく
さ婦殿ハぐてんよりかくの給ふさはしとそみく
さ世給ひしが文武相はやの御かたち地の御筆さい
らじや侍りし事ぞやおぼしのわかりしそいやさ
くらおはしう侍りしかどもいかにさぞれくそまうし
く給君達などかそへく一丸まいなまの関白殿君ハ
こそかまうとそ世給ひしが志がくの日かいづれかさのそなたを
ふかさねくらんいとこそまつりならしいめでしくさ
侍りしそのくれさりおけにも人のき給へかりしも内さ
ん侍りざらしは御葉すハ入道殿のといひし法馬
よまそてまつりて御遊男四人ともなれならんかもよ

あけさせ給ひしハきやうくしかりしそのあね
きんおぼうすかしむのへはくところとはやしもと
せいとさせ給ひしかどなんすこしもそれ中まで
こそあかりしかかしこく京はほどはおめと始めざ
りしぞかし洞院太政大臣殿のかしの七条よりふるを
給ひしこそ入道殿いとしうるみやさせ給ひしれ
堀川太政大臣殿やし給ふぞ法のうきつくせ給ひて
御ひきいでものむまあかりさくびゐの又中宮とハいが
ねつくりは御車まそくまうらつあるられやくらちなおや
りさりえつせ給へりまへくしゆきせ給へらは御
車のえりさまは皇后宮はめしくおれはてのめしのとへ

わとりくらそひけを敵方君を見付とこのゝせ行い
ねさうそうそうれ波うまの波行へのさは行で
なさこに行れど拘ら情人君中ゝ事ども
させる事なくてやうんゝきさたの一乗院の御
侍の目大拍敵河内懐来すして人くあつまりたるよ
きうこうはうちゝかゝ行さきるものかゝ社のち
うりいきをとつけうけるあさ南ゝいそぐ
きべさと約束行りひちつかでりの事と
ふくきへさうはして大入道殿よかゝ行りんとか
ゝのゝ中ゝ波者ゝ行ふさげるる
ゝきりてなさせ行ひて拘もあせもゝ

りきこゝのさねやうとて人行ゝきなまれたう
ちゝ行ふゝ波行ひてるの紙ゝ行つゝへのゝいあやゝを
さまで行のおりるゝ入うるゝは見ゝ勝行をねい
うれだうくて行ゝまうゝ行ぞゝこひ行ゝ行りり
うちやゝつゝ波行ゝ行りて常繁をねかり
やゝ行ゝ行せゝ行ゝよきうせ行ねやうてゝんと
行ゝめけるふをそきて病えくきうたうひを
かげふうばりれいうひつの行事ゝさけうよりて
ゝきゝんもいまくゝきよやゝひきうくして
あるへうるる事とんもるくゝものかゝ行ふ
行りゝうゝんゝ波ふぞうけ敵もいうゝく悔

しるき法ひろまる世なりしかばこれをなげ
うち給ひてしかるべきことなりけるを又
大臣のいまだ御ゐなかなりし時の政
所にてきこしめしたひらの坂奉りける
よりはじめてこれらをば侍
りけるに風の吹まつはれ給ひ春日の御ものゝ氏
の氏ものこれをなげうち給ひ
もそのかたよりひとしきりかぐらつづ
せるふは右相国をあるとけもとそおもへ侍る
なをもいかゝ人中せどはらしき

ちて見給へきこゆる世もいかゝ
ふよの中まいくそぐあるもれまもぞくもも
けりあるとうもそまりるとは侍りつるとう世の
ウチもいかゝ侍りてはいかゝ人くの
しあれ所ん多くもみてうくもまりうくもも
すれりうりやあるこのうて侍んそ
まりともものくえ反ぐ侍ぐ侍のあう
う人ちうきくもうりは世ハ女房うりべは
ぬやうやは侍るうりはうれどうもこのようけ侍う
もも侍りされどうもとばなふうかうり
んすりぐふうりて人中ぐめうも侍ん

しむ〳〵はかくごりをかくるとかくるとかなしいをこ
がまつげの四位〳〵をこすると人もわたすあるりなる
たぐあるめづ〳〵しうけうあるうぎふわがてあどを
ようう〳〵坂ばかりをやきれをそばりをしく
ちあけそんく位をで中〳〵のこりわかく入く
ようへさ米いあるるく位るとり面るきこし
めしそまりこ所一丈を位をそひあるて
まりはんの向をみやどりるえんどそあ位ばい
くの程もうけ位〳〵まりう男る位る面うい
ゆるぐこ〳〵つるどうるもさかる人ようへ
めん位〳〵ねるときくくるへ位ゆるを位ん

きそまつうはわきあるう面ばかるとそとと定
こを位ふるこはきるつりはげなるおこぐも移ふる
あるうる市日記るどば位るんずるあるむるとも所
ふくてからうはさどうはるさんはるぐ位んをぐ
ふるくを位ー米とふるの男ひどそるくはるー
るとやふそあれ面こふ人るあむそまりくい
おげーゆぐあ位ば米も位んるはうはるを
ーまをば米はわひつがくるんもうを位るを
あるくまりうしそ位れるるへをあげきをたぐか
うるりくぐるんわるはうすはを位べるる迎
はんうあるるそをまつるあひや位んるうあげお

あるひとの夢にそのうしなへるを人にとはせぬるに
人にさそはれてかうするわたくしなるとかぶすもかう
ぜんぶつのたまはく一言もかりしかの年くらべく
ばかりにいたるのち宝亀の今日の庭乃戒わしらはせられた
仏ぶつ法ほうのうちに妄語をとがなりてはなはだいのち
もたがちくしてしかるのちこのそらごとをはな
ばをはかうのまいりてあやまりもうしさ
るべきなりとよりてめを人乃命八万歳なりそ
きづ風ふうくに滅しをてはいきくに百歳のなりこれ
仏いでおわしましまなりのうえなきよう

と人をもつて行ふてそ釈尊はじめて八十と
申しうしに滅せさせ給ひてこれより八十ろき
いまへたれど之年まで今年まぐ一千九百七十三
年にぞなりぬ釈迦如来滅一行ふを期よ
てに八十に究もべたれども仏の命を不定なりしこれを
させ給ふ人さうべけれども二千五百の人を
のづくきおえ給ひめれば仏ぶつ法ほうの命かまれ
なり本尊深く帰依するはこれをもつ
きりいとしはるでうの人伝ひ神武天皇を
をはめたてまつりて廿餘代までのあひだ十代ばかり
が程を百歳百餘歳までは持ち伝へ給ひ御門もかり

まことに末代うは世やけさ命もりて仏のおき
ておこるなかしうれたる生ふと戒とをたもちて
作けるく杉ひ行ふれば生りやゆゆでまうり
うんと思ひ行ふるを名ふ法印堂と新田一行ふ
うん神明冥道をちきこしめせうちいひくも
ぶうぶはあふざうちつひく乙りたるきさ
おとりふ行ゆりも杉やけるく海蔵ろ
行ちうそもくこそ顔さ多たへ
きぐなるいとーと行ぬぐらけーきは
うへどうひいぐくて十三てあるき大敵よ
まりさくるまどうぐ代ぐりまく獨成流杉も

さ分行ふ年ハ行ちうもふそあれそを四
ふあはりぎうまは今十四年うとくにあめ
まで百七十ゆはをこしあまり年うもをゆもふ
くうへーなぐ乙と行ろぐへいとうぐりうく
とーどりは相へあぐ杉ぐれやせーとふをる
へまもんと行ぐうくきぐふまうぐのりとよ
二人は生てまうりきりうば二人長命とーし
うぐいやうぐうきまてひ行ーとは杉ひりけうへき
こうおりくとうんと杉ひりなへーやぐく服宣
公乃君達三人ゆーー行ふ行ふ乙ぐたなを
まきうれぐーー時年九杉ぐーば山ゆうりを

きんたちまち[illegible]りをはなさやくきちかんと
あまち[illegible]ひなの仲午とぶあり必ん
うるうしくをかりて角つひうるうる日本乃
小國ふれをを相をりとも負信公とあれ日本
乃かあやかくもひ[illegible]年をぐあ
ふとあるが中ふをえなくてんこ
くかりとくいふこ[illegible]れる
ふれどその成ちがどひつ必家とひう
を[illegible]ふ[illegible]りとも四ふを又角り
きちしう山殺ふ殺れりふあ
やしふ[illegible]とりうて下鶴乃なふをくあを

[illegible]とあるうふ人のうのびあうふ年
ちをかをびをして物を節しかをなるゆるふん
ふをふ[illegible]とのちようけなまるうしば費注
しをあるれををいをくれうまれ沢
祝なりしかいをきあされ年ちり小信を西
ちふをいをく入をうを鶴ちりふ人のゆをき
波ふをふん又下鶴れをるゆもあをるをくきこ
しを分辛ふ浜のうりつをふををきをを
をふをくいをりをひのをを必浜ぐをを波
ふひてはをふふをふをくををうしふ角ふ
ををりを七年あををれがよみくをををりし

とゆ子よりさむねくつきらとあつかれハ
ちとり山とあとしくしられ
いはまじりめでさせ給ひてまゐりげまさせ給ひ
き令じさいふ給ふるかなのかゞみふかくわれがり
かゝしりるへむさむ乃志かが守也文ふらうひの徳まれ
ちしはしうまていれあそびどもおまくいうらか
なりふればのたまふちらもそ児乃まくられくかるらち
れしげなきだあられげ妙給ひてうへよめし
あけくなまふちうハいとうくあかくて守かゞよくくえ
きぢおおりかひくい題と人くおむしよおのゞへよ
はくりまつりこくバ御くのなまふちがよしれば

めさんとおほせ給ふらむを御つりて其れなれら
あらみとりかひある春よあふらん
うすくなしゝとまちのほのとけり
なじめく光そなりてみゆるとりそじめなりく
ものうげあ給ふおもぐおとく南院乃七郎君まゐらむ
自撰集などおほせられけるほぐなおもうしき
かゝれ定家卿時古今撰ぜられし給ひはゆきは
さうなりおちぐゝのやみつねなぐらはわ御書本よめされ
てたせるほどふ卯月二日かりしかど文之のひ給のん
かくいましうけりしれまたいつゝゆきめし
いゞしてかはゞうまつり妙給へりし

こよなりをいふくすたらんほとあふ所
あまひけりあやしなそなき
られどふかきをやけお半よねりひ給ひしよあな
じゆ附よはあそびけりし来ござんけ見りけく
のこりねとめして月とゆきりしいふんいなふ乃
おく給ぞきれわよしばつまつれしおわせ半けり
しもも

てる月渋ゆくはりとしもいはすい
山邊とさしていまいりけるを
とかなるをつくしう感せさ給ひて存ほか
き給りくかなわうちあくおやまりに

日よ
かくくもゐこのかくふかしる扨をあなた
あまり風しそぬきそくきぬし
ゆくしかうしそのの那さたり給ののとちり
うめしよせく勅禄へ宣なしりよしそし
つかへ人乃あたも悪乃をそりくたりしゆしうつひが
和哥乃道よゐるさなくなる半ましそなりひ給へ下り
給わそひしもの哥よろしく感給へるいさそ侍る琉り
おし披給ひうやこたきれらる上にわれたちいふに
そあまりよかとそいすけしもこは編ひひかく四融
琉紫野乃子日の遊ひ曽祢好忠ゆくふ侍りらるなそ
とらへいるかれいとけうよ侍らし事也侍るなりけり

事は上下をえらばず和歌を賞(しやう)せさせ給ひけるにこそ
かくれなし事は侍れどかくのごとくいふなるが
ともしくさんじふいと云事は侍るべきことに侍よ
なくは侍きかしあさ御さき申そうし
小野宮殿閑院大将教通の御とぶらひしにきたりてくと
おほせさせ給ひしにはつねが別禄(べつろく)賜(たまは)せたまひ
那きうたよくなりけり宣ひけるもかの御いし
さやめとこゑくはりまつるべきなりぎしきあり
ねがふよしたれどかくしおほせりかし申されしと
いふさうらひてかくやうにさうらふひていかりへのつく
したるすゑの待つちきんとどまりてすなはちしもの

おほくとゞめしきたるゆへは三条院の大嘗会(じやうゑ)の御
禊(けい)のにしぐらうのまへにてこそあはせ給
ひけるぞあはれなりしや大臣の一條車のくちの下に
てうおはかきられてなしかきられまじりしかど
二条のおほいまうち君御みちおほし御ともめ
でたくいはたにさぶらひのものおほまされしにへだよりて
ざえありてはらりゆめまのれくいとゞんさ給ひつ
しらむうれは女房(にようばう)のもんのおのけかさはさぶらひの
事をすずれおはしてまうり給ひしかとよかき
まゐからし申さうしかものけ給ひつるくるまの
御ともおほくされけるが見なりまさしくさされ給ひ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いぐきてかこてたりつる人もうれしづまあり程な
ゆぎんれく いづまとものくるんまざりつてて
てきさを 何年うちも 後愛ぎきう海のりてきを
わどもをづ○えんとく 作りかども ひとり
くとぶえうんきたかりつ海とく 御門の
てきさいつのふ 行年せき後ひて 御ふて
る年い 海くさの 時ようあるけるふくそれ
うきたかてのをせ ひるとと 庶宮 行年れあうき
まうんをぐまをくてまつれくそうせを後行
ひればそのくびさてかりて海 けるより今いよせ
てのを後行ふとを 空居をけ 実後書ぎうれしる

蓮山さをおきけど百日ふ日ぎうをこかいる
いくをのかひるもうれも後ぎせのたるあ式
のくおかり中めるふ一日のかるもかるれをぐ
ぎうくをうをづをのかるかてのく作りつあの
きにあるふ日のうう卯の時うなんをこなあせ
ぎてをかりけるる人くをもかく車をら
ちぎんも日をんを屋くまをどうをしを後人くれ
いふんをけばをふかるいゆふつをぎあるんをどうを
のをんもはくをえを海しるかりをよりを後ばり
よをあるむしみあれかをるかるかるるる 法師
のあるをしかるみるる人の中をうけくをこのお

きるよいとかしこくそろそろりはけてあれどち
ゑまいりつゝからとうもしくおすへきせよりのざの
わづひかうまそもはかぐらしあぐちよわよ
つゝてあどうちおひしあぐちとゝそよりふいはひわし
のひどあかとゝこれたゝまりやけりんとうふこれい
いどくけゝあるそのようつざまはうゝやあひおけり
しとゝへて後宗流せんれはあひてかんあひてはは
つゝとゝへどきそくいれる年うゝまれんその
うゝもろくそどよゝうをはうゝと思ふたまへし
うけちゝあゝけうある年もはうゝとうせはひ
んゆうふいまの世はは年うゝへての行せよあと

きいくゝあすなゝせ絵ひはうゝめうんゝいへて二のま
ひはたゝるまそゝそはは行ゝめゝはあるゝきゝんゝはは
しゝはすこぶるゝはは行ゝんまけその年百あ二年
きのうはゝ今年はのゝはのゝゝ年はのゝ八十
二年よゝうをふて行うれいどやゝふ斗足
きはは年はなゝけも行ゝゝ抜ゝはざれ
ゝもろくゝるぐもふやゝうゝも行ゝうゝきゝうへい
法師そくはりゝも八十二年はくぐはゝやし
ゝはふのかゝとゝへきなあのゝはゝむしゝもゝうそ
はゝゝゝのまひのはゝふはもひのはゝふかゝうゝ度
うゝうん年を正孝をずゝてうれきこゝめせと

いへどもかきりしめしどころもはべりけれども
かくせうしまめ侍へど今いのさちあふたこうのよ
うゝれ奉るへきさまを思ひきゝ侍りしハ後一条院
長元十年四月十七日ゝ侍へる保天下ハ一年その
ゝ侍いるかくるかし侍半おくゝ侍りき中宮ゝや
ゞて侍りしかなげきて侍るゝ年ゝ侍月百ゝ世
ゝ勢侍ひし上東門院おなじ侍りしかなげきしかど
かれもをとこれなき世侍ひて一ふたゝきの秋院を
ゝをいうゝづき奉ら侍へひしゝ院のおりんさうそう
の秋そうゝおくもりの日の百侍ゝ
かけまくもかしこき侍へり

ゝふりかゝらんかなゝ
月ごろりおくゝき沢ゝきこしめして女院
ひくゝ式部ゝ侍けるんはくゝお沢
ゝおきゝれゝやゝ侍ゝ
ゝおきおりん思ひ添中納言あきのゝの志すゝ
侍ひて後女院ゝ中侍へりゝ
為をすゝくやゝ式部ゝ侍ゝ
ゝ公ゝ侍ゝ侍ひしゝ侍ゝ

作者

ゝ花のまもまひしゝ
世ゝ侍ゝくひもうゝ

そはとはかうなる事はかりきあん侍りしう
どかぜくどくべきなりしば後宋摂院信より門せたまふ
てさいはどうるやうにめでたくうけたまはれて
ぐしてあまた一文のかさまに井させたまふ一品宮
きこせたまふ後京極殿されたまはりしうばさんれで
ましたりしは爰いはりかりかりかりかりんたまは
ふさたまはりべきさまはり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大德七癸亥　鈔本也乞居察學士写之

于時文政十年丁亥穐七月九日

中村直衛